

# 「特別の教科 道徳」における 道徳的態度の指導法について

—「寛容」の育成を目指して—

同志社大学文学部／同志社女子大学嘱託講師

島田喜行

## はじめに

本論の目的は、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科と略記する）の内容項目「寛容」を、道徳的態度の育成という視点からどのように指導するかについて考察することである<sup>(1)</sup>。

現在、小学校における道徳教育について、改正小学校学習指導要領にのった新たな指導を平成30年4月1日から全面的に実施、展開するために、その指導のあり方がさまざまなレベルで議論されている（2頁参照）。こうした状況に鑑み、本論では、学習指導要領の改訂の基本方針と道徳科の目標を踏まえつつ、道徳科において道徳的態度の指導を担う教員として注意すべきことは何か、を検討する。

本論の考察の手順は、次のとおりである。まず、道徳科において道徳的態度がどのように定義されているかを確認する（1.）。次に、内容項目「寛容」を、道徳的態度の育成という視点から指導するための授業を想定した道徳学習指導案（略案）を提示する（2.）。そして、提示した指導案に即して、道徳科において道徳的態度の指導を担う教員として注意すべきことは何か、という問いについて三つのポイントから検討したい（3.）。

## 1. 道徳科における道徳的態度の定義

考察の準備作業として、本論でその指導法を検討する道徳的態度の定義を、『解説』に即して確認する。

道徳科は、「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要としての役割」を担うものである。道徳教育を要とする道徳教育では、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」が目指される(15頁参照)。道徳性とは、「人間としてよりよく生きようとする人格的特性」のことである。この人格的特性という意味での「道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度を養うこと」、これが道徳科の目標である(19頁参照)。

このように、道徳科において、道徳的实践意欲と態度は、人間としてよりよく生きようとする人格的特性である道徳性の一様相であるとされる。しかし、道徳的实践意欲と態度が道徳性の一様相であるとはどういうことか。

この問いには、次のように答えることができる。道徳的によりよい生を目指して努力するさいに、わたしたちのなかで働いているものが道徳性である。この道徳性は、大きく三つの観点から捉えることができる。道徳性は、この三つの観点に応じて、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度として、わたしたちに立ち現れてくるものである、と。

では、道徳性の一様相であるこの道徳的实践意欲と態度は、どのように定義されるのか。それは、「道徳的心情や判断力によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性」のことである。ただし、道徳的实践意欲と態度とを腑分けする場合、前者は、「道徳的判断力や道徳的心情を基盤として道徳的価値を実現しようとする意志の働き」と、後者は、道徳的判断力と心情に「裏付けられた具体的な道徳的行為への身構え」と定義される(19頁参照)。

ここで、注意しなければならないのは、道徳性にかんする諸様相にかんして、特定の「序列や段階があるということではない」ということである。言い換えれば、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度の区別は、あくまでも、「道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践するための内面的資質」として、一体的に働く道徳性をもつ三様相と考えなければならないということである<sup>(2)</sup>。

以上のことから、本論では、道徳的態度を、道徳的判断力と心情に裏付けられた道徳的によい行為を主体的に選択しようとする身構えと規定する。

## 2. 道徳学習指導案（略案）の提示

では、わたしたちが道徳的判断力と心情に裏付けられた道徳的によい行為を主体的に選択しようとする身構えである道徳的態度を指導するときに注意しなければならないことは何か。この問いに答えるために、内容項目「寛容」を、道徳的態度の育成という視点から指導するための授業を想定した道徳学習指導案を提示する。指導案（略案）は、次の通りである<sup>(3)</sup>。

### 道徳学習指導案

学 年：小学校第6学年

主題名：異文化の寛容的理解

ねらい：

他者を歓待するために用意された料理の多様性（異文化性）との出会いについて考えることを通じて、自文化とは異なるもの（異他性・他者性）を認め、理解し、尊重し、広く受け入れようとする心である寛容の精神と道徳的態度を育てる。

主題設定の理由：

現代社会におけるグローバル化の進展は、わたしたちに、さまざまな文化との出会いを経験する機会を増加させている。しかし、こうした出会いの経験は、ときとして、わたしたちに強い衝撃を与える。というのも、そこで経験される文化（異文化）は、わたしたちがもっとも慣れ親しんでいる文化（自文化）との差異（異他性）を鮮烈に意識させるものとして、わたしたちに立ち現れてくるからである。わたしたちは、こうした文化的差異の経験とどのように向き合うべきなのであろうか。これが本授業の主題的問いである。

そこで、本授業では、「わたしを歓待するために用意された料理」を手引きにして、自分とは異なる意見や立場も広い心で受け止め、相手への理解を示し、尊重しようとする寛容な態度について考えてみたい。本授業を通じて、自文化を優先してしまう「自分本位に陥りやすい弱さ」について、子どもたち一人ひとりが気づき、そのあり方を問い直すきっかけをえること、これが本授業における教師の願いである。

資料名：「歓待料理リスト」(以下の①～⑫までの順番でB 5用紙に印刷する)

- ① 鰻のひつまぶし
- ② すっぽんフルコース
- ③ 鯨のベーコン
- ④ 蜂の子(クロスズメバチの幼虫)の塩炒り
- ⑤ イナゴの高級佃煮
- ⑥ 明石のたこと大間のマグロ大トロの刺身
- ⑦ ウツボカズラご飯(ウツボカズラを容器にして炊いたご飯)
- ⑧ 子羊の脳みそのソテー
- ⑨ エスカルゴとファアグラのソテー
- ⑩ ウィッチェティ・クラブ(ガの幼虫)の蒸し焼きとミツツボアリの蜜
- ⑪ 燕窩菜(アナツバメの巣)のスープ
- ⑫ 二つ星シェフ特製手ごねハンバーグ

展開過程：

(導入)

長期休暇中、久しぶりにあった友人から地元の名産品だというお土産をもらったんだけど、そのお土産が、ちょっともらっても困る食べ物だった。君たちにもこのような経験がありませんか？

指導上の留意点：

授業の主題に関わる問題意識や関心を児童に持たせるために、子どもたちにとって身近な話題となるように配慮する。

(展開)

基本発問：

「歓待料理リスト」のなかで、君たちがぜひ食べてみたい料理はどれ？

指導上の留意点：

子どもたち一人ひとりの興味関心にまかせて、自由に選択させるようにする。このとき、食べたいものと食べたくないものをはっきりと分けて記述(メモ)しておくように指示する。

補助発問①：

じつは、遠いところから遙々やってきたあなたを歓待するために、現地(地元)の方がわざわざ特別な料理を用意してくれた。それがこの「歓待料理リスト」に載っているメニューである、と考えてみてほしい。現地の方はみな、心からこれらの料理を本当においしいそうだ、食べたいと思っている。このとき、君たちは、さきほどあまり食べたいとは思わなかった料理を食べてみようと思いますか？

- 補助発問①にたいして予想される子どもたちの答え
- ・それだったらがんばって食べてみる
  - ・やっぱり無理
  - ・しっかりと謝意を伝えたいうえで、現地の方に美味しく食べてもらうなど

指導上の留意点：

この質問について考えたときに何を感じたか、考え出した答えの理由をしっかりと意識させるようにする。

補助発問②：

ところで、わたしたちの食べ物にかんする好き嫌いや食べてみたいという思いは、いったい何に由来するのだろうか？

- 補助発問②にたいして予想される子どもたちの答え
- ・生まれつき決まっている（自然なもの、生理的なもの）
  - ・生活環境によって決まる（人為的なもの、習慣的なもの、偶然的なもの）など

補助発問③：

たしかに、食物アレルギーのような場合には、食べられないものや食べてはいけないものは生まれつき決まっているだろう。しかし、わたしたちの好き嫌いや食べたいという思いがたまたまわたしたちの育った生活環境によって決まっているものだとしたらどうだろう？

指導上の留意点：

このとき、自分の好き嫌いや何かを食べたいという思いがこれから変わるかもしれないこと、変えられる可能性があることに子どもたちが自ら気づくことができるように配慮する。

中心発問：

今、わたしたちがもっている食べ物についての好みや食べたい食べたくないという思いが生まれつき決められているものではないかもしれないということを意識して、もう一度、「歓待料理リスト」を見てみほしい。君たちが、最初に記述（メモ）した食べたい食べたくないの区分は変わるだろうか？それとも、変わらないだろうか？

指導上の留意点：

ここで、リストに記載されている料理が、遠いところから遙々やってきたあなたを歓待するためにわざわざ用意してくれた料理であることをもう一度、強調する。

補助発問④：

わざわざ料理を用意してくれた現地の方の立場になって考えてみよう？

→ 補助発問④にたいして予想される子どもたちの答え

- ・たとえ一口だけでもとにかく食べてみる
- ・それでも食べたくないもの、食べられそうにないものがある  
など

指導上の留意点：

このとき、歓待される立場だけでなく、歓待する立場にも身を置くことによって、子どもたちが多様な視点から物事を考え、感じられるようになることに配慮する。

補助発問⑤：

誰かからおもてなしを受けたと感じたとき、あたたかく歓迎してくれていると感じたとき、わたしたちが気をつけなければならないことは何か？

→ 補助発問⑤にたいして予想される子どもたちの答え

- ・たとえ自分にとってちょっと困るものや嫌だと感じることであっても、相手の立場になって、その歓迎にできる限り応えようと努力すること  
など

指導上の留意点：

「寛容」とは、「自分とは異なる意見や立場も広い心で受け止めて相手への理解を深め」、「互いの違いを認め合い」、「自分と同じように他者を尊重する態度」であることを子どもたちに気づかせるように指導する（46頁参照）。

（終末）

授業のねらいである「寛容」についてまとめながら、今後考えるべきことを子どもたちに提示する。

### 3. 道徳科における道徳的態度の指導法についての考察

前節の冒頭で提示した問い——わたしたちが道徳的判断力と心情に裏付けられた道徳的によい行為を主体的に選択しようとする身構えである道徳的態度を指導するときに注意しなければならないことは何か——について、指導案に即して、ポイントを次の三つに絞って考えてみたい。

第一に、道徳教育を担う教員は、内容項目「寛容」の位置づけに注意しなければならない。『解説』では、項目「11 相互理解、寛容」は、小学校第3学年になってから指導するものと位置づけられている。このように位置づけられている理由は、子どもたちが、第3学年から第4学年にあたる時期になってようやく、「自他の立場や考え方、感じ方などの違いをおおむね理解できるようになる」からである。さらに、第5学年から第6学年にあたる時期に入ると、子どもたちは、自分と他者の「ものの見方、考え方の違いをそれまで以上に意識するようになる」。その結果、この時期の子どもたちには、「考えや意見の近い者同士が接近し、そうでない者を遠ざけようとする行動」が現われる。教員は、このような特徴をもつ子どもたちの発達段階に留意しなければならない。この留意のもとで、教員は、たとえある事柄について自分と考え方や感じ方が異なる者であっても、「相手の立場に立って考える」ことの大切さを自覚し、互いの違いを認め合おうとする身構えを子どもたちが身につけることができるようになるための指導を心がけなければならない（46-47、77頁参照）。

第二に、教員は、授業の主題設定の理由を自らにたいして明確にしておかなければならない。これは、教員が授業を行うさい、なぜこの授業でこの内容項目を取り扱うのか、そのねらいは何かを明確に把握していなければならないということである。本論に即して言い換えれば、『解説』の記述を踏まえつつ、寛容と道徳的態度とを自分なりの仕方で明確に関係づけられるようにしておくということである。これは、どういうことか。具体的に論じよう。

『解説』によれば、「寛容」とは「自分とは異なる意見や立場も広い心で受け止めて〔自分とは異なる意見をもち異なる立場にある〕相手への理解」を示し、自他を互いに等しく尊重しようとする道徳的態度のことである（46頁参照）。しかし、寛容が道徳的態度であると言えるのはなぜか。

その理由は二つある。まず、一つ目の理由は、自分とは異なる意見や立場を広い心で受け入れようとする寛容さ、言い換えれば、ある事柄についての自分とは異なる考え方や感じ方にたいして広い心で受け入れようとする態度を身につけることによって、子どもたちは、「物事を多面的・多角的に」捉える力を獲得することができるからである。この「物事を多面的・多角的に」捉える力とは、さまざまな考え方や感じ方をもった「多様な人間が共によりよく」生きていく社会を実現するために「必要な資質・能力である」（75頁参照）。

そして、二つ目の理由は、自分とは異なる意見や立場を広い心で受け入れようとすることを通じて、わたしたちは、自分が慣れ親しんだものの見方や感じ方を特別扱いしようとする「自分本位に陥りやすい弱さをもっている」（46頁）ことに気づくことができるからである。

多様なあり方をしている他者と共に生きていくという意味での共生社会の実現に参与しようとする身構えと自分本位に陥りやすい弱さを克服しようとする身構えを子どもたちに育成すること、この二つの理由から寛容の育成は道徳的態度の育成と等価とみなされるのである。

最後に、第三に、教員は、授業で取り扱う内容項目について、自分なりの仕方でその理論的基礎を明示しつつ、複数の観点から説明できるような準備を整えておなかけなければならない。なぜか。それは、授業の場での子どもたちが、ときに、教員の意図や予想を超えるような考えや感じたことを主張することがあるからだ。教員は、このような状況に遭遇すると、その対応に苦慮するあまり、図らずも自らの考えや「特定の価値観」を子どもたちに押し付けてしまうことがある。しかし、教員による特定の価値観の押し付けは、「道徳教育の目指す方向の対極にあるもの」である（15頁参照）。これを肝に銘じつつ、教員には、子どもたちの主張にたいして柔軟に対処することが望まれる。これが、内容項目について、複数の観点から説明できるような準備を整えておなかけなければならない理由である。このことについて、本論で取り上げた寛容を例に、具体的に論じよう。

すでに述べたように、『解説』によれば、「寛容」とは、「自分とは異なる意見や立場も広い心で受け止めて相手への理解を深め」、「互いの違いを認め合い」、「自分と同じように他者を尊重する態度」のことであった。しかし、



自分とは異なる意見や立場を理解するその仕方、違いを相互に承認するその仕方、他者を自分と同等に尊重するその仕方とは、具体的にどのようなものなのだろうか。

この問いにたいして一つの答えを与えるための手がかりは、寛容をめぐる理解、承認、そして尊重の仕方にかんして、大きく二つの解釈可能性があることを学ぶことである。

二つの解釈可能性とは何か。それは、「消極的寛容」と「積極的寛容」の二つの解釈のことである。消極的寛容とは、他者のある考え方、ものの見方や感じ方にかんして、自分は賛同できないけれども、それを善いと考え、望ましいものと見て、それを好ましいと感じる他者のあり方を否定したり排斥したりしない、という仕方になされる理解、承認、尊重のことである。これは、わたしとあなたは、善いと考え、望ましいものと見て、好ましいと感じるものが異なるのだから、その違いをお互いに認めたくえで、積極的に交流することなく、それぞれの領域で生きていこうとする寛容である。端的に言えば、自他の違いを、いわば表面上、理解し、承認し、尊重し合うことである。

これにたいして、積極的寛容とは、わたしがこれまでまったく知ることなく、考えたこともなく、感じたこともなかったようなあなた（他者）の善いこと、望ましいものや好ましいと感じることに興味をもち、積極的に理解し、自らのうちに取り入れようとする寛容のことである。一言で言えば、自分とは異なるものを、いわば心の底から理解し、承認し、尊重し合うことである<sup>(4)</sup>。

教員は、寛容にかんするこの二つの解釈可能性を学ぶことによって、子どもたちの主張にたいして、いっそう柔軟に対応できるようになる。

## おわりに

これまでの考察を振り返ろう。まず、『解説』に即して、道徳的判断力と心情に裏付けられた道徳的によい行為を主体的に選択しようとする身構え、という道徳的態度の定義を確認した。次に、道徳科の内容項目「寛容」についての道徳学習指導案を提示した。そして、この指導案に即して、道徳科における道徳的態度の指導を担う教員が注意すべきこととして、子どもたちの

発達段階に基づく内容項目の位置づけに注意すること、授業の主題設定の理由を明確にすること、内容項目について複数の観点から説明できるように準備することの三点について論じた。ここで示した成果をもとに、さらに道徳科の指導法についての検討を重ねていきたい。

## 注

- (1) 本論では、文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成27年7月）」を主たるテキストとして使用する（以下、『解説』と略記）。本テキストからの引用は、直後にその頁数を明示する。テキストは、文部科学省 HP ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/1356248.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1356248.htm)) からダウンロードした（2017年4月1日）。
- (2) 『解説』において、道徳的判断力は、「善悪を判断する能力」のことであり、さまざまな「道徳的価値の大切さを理解」したうえで、ある状況への対処としてふさわしいこと、望まれることを「判断する力」のことである、と定義されている。また、道徳的心情は、「道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む」、「人間としてのよりよい生き方や善を志向する感情」と定義されている（19頁参照）。
- (3) 本節で提示した指導案（略案）は、横山利弘監修、広岡義之・他編著『楽しく豊かな「道徳の時間をつくる」』ミネルヴァ書房、2015年、27頁に記載されている「道徳学習指導案 ※略案」を参考に作成した。
- (4) 消極的寛容と積極的寛容の区別にかんする基本的なアイデアについては、以下を参照のこと。Mendus. S., *Toleration and the Limits of Liberalism*, Macmillan, 1989, pp.131-133.

## 参考文献

Mendus. S., *Toleration and the Limits of Liberalism*, Macmillan, 1989

文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成27年7月）』  
横山利弘監修、広岡義之・他編著『楽しく豊かな「道徳の時間をつくる」』  
ミネルヴァ書房、2015年